

令和7年を迎えて!



函館新聞記事（令和7年元旦）

新年あけましておめでとうございます。
今年もどうぞよろしくお願ひいたします。
いよいよ令和7年がスタートしました。

令和5年8月24日から本校の校門前にある掲揚塔下に
掲示した看板には「令和7年度に創立130周年を迎えます。
（函館聾学校・函館盲学校）」と書いてあります。盲学
校も同様に掲げている看板に記載の「令和7年」がスタ
ートしたのです。既にホームページではお知らせしてお
りますが、記念式典は令和7年10月25日（土）の午後
に開催する予定です。午前中は「創立130周年記念学
習発表会」を両校で実施し、午後に盲学校の皆さんが
聾学校の体育館に来ていただく形で式典を執り行いま
す。

もし、学習発表会や式典に参加してみたいという関係
者の方がいらっしゃいましたら、是非、お問い合わせくだ
さい。大歓迎です。（準備の関係がございますので、必ず
函館盲聾教育後援会事務局のある函館聾学校教頭宛に御
連絡ください。）

どうぞよろしくお願ひいたします。

また、昨年中、本校におきましては地域の皆様に大変お

世話になりました。令和5年度から立ち上げた「函館聾学
校ボランティアバンク」には、44名という多くの皆様に
御登録いただき、様々な教育活動や本校の助けになる活
動が増加しております。本当にありがとうございます。

このボランティアの形を「地域学校協働活動」と位置付
け、令和7年度のグランドデザインに反映すべく準備中
です。これからも本校の教育活動に御理解と御協力を
お願ひいたします。

そして、年のはじめに強く思うことがありました。

本日が仕事はじめとなる本校に届いた「深堀町会だより
（1月号）」には、谷山会長様の新年の御挨拶が掲載され
ており、防災対策を推進する本間様の記事も一緒に掲載
されておりました。私も同じ町内会の一員として、そし
て、その町内にある学校をあずかる者として、同様の気
持ちであることを改めて確認させていただく機会となり
ました。

谷山会長様が冒頭で触れておられたとおり、令和6年
の元旦には、石川県で最大震度7の「令和6年能登半島
地震」が発生し、多くの方がなくなったり行方不明にな
りました。更に9月には同じ地域で記録的大雨が襲いま
した。

24時間雨量が400ミリ超という観測史上最大の大雨
によって、復興の遅れが指摘されていた地域での被害が
拡大することとなりました。気象の専門家によると、日
本列島はどこでも地震のリスクやこれまで経験したこと
のない気象状況にくり返し出会うリスクが高まるとのこ
とです。本当に防災に対する備えは大切で急務です。

昨年、私は東日本大震災で多くの被害者を出し、石巻
市によって震災遺構として整備され、一般公開されて
いる大川小学校に行ってきました。石巻市を訪れること
で、自分の気持ちを引き締め、自校の備えを高めて子
どもたちを守りたいと願ひ、自らの目で現場を見るた
めです。短い時間でしたが、私自身が本物に触れ、
実体験することによって学びを深めることができたと
考えています。

この経験から、これまでの取組を更に徹底し、不断
の努力と見直しを誓うことができました。令和7年も
継続していきます。

これからも、函館聾学校をどうぞよろしくお願ひ
いたします。

生きる力育む

聾学校



生徒の聞こえ方に合わせて授業を行う教員と児童

「触れさせる教育」を推進

今年度からの特別支援教育の推進が、特別支援学級の設置、個別指導の導入、小規模の学習グループの活用など、多岐にわたる取り組みが実施されている。中でも、今年度は「触れさせる教育」を推進している。これは、聴覚障害のある児童が、視覚障害のある児童と交流し、お互いの生活や学習の状況を理解し、協力し合うことで、生きる力を育むことを目指している。具体的には、視覚障害のある児童が、聴覚障害のある児童の手を触れ、物の形や質感を確かめたり、聴覚障害のある児童が、視覚障害のある児童の目を見て、物の色や形を確認したりするなどの取り組みが行われている。また、お互いの得意分野を教え合ったり、協力して課題をこなしたりするなどの活動も実施されている。この取り組みを通じて、児童たちはお互いを尊重し、協力し合うことで、生きる力を育んでいる。



130周年に合わせて寄贈されたヘレンケラーの色紙

1895年(明治28)年	米国人キリスト教宣教師、ドレーパー・ヘレン・ケラーが創設。札幌市の南側に館付近に敷地を設け、盲学校と称する。
1932年(昭和12)年	がらみ、北見道立函館ろう学校となる。盲学校長の佐藤成久氏が学校校長を兼任。
1950年(昭和25)年	北海道視覚ろう学校に改称。
1954年(昭和29)年	現在の校舎に校舎を新築移転する。
1992年(平成4)年	心身障害児通級指導教室(現通級指導教室)に指定。
1995年(平成7)年	創立100周年記念式典を開催。
2019年(令和元)年	平成31年度学童・生徒・児童クラブ・児童福祉施設事業協力校(3年間)に指定される。



学校の特色などについて語る校長

「特別支援」のモデルに 専門性継承にも力

今年度からの特別支援教育の推進が、特別支援学級の設置、個別指導の導入、小規模の学習グループの活用など、多岐にわたる取り組みが実施されている。中でも、今年度は「触れさせる教育」を推進している。これは、聴覚障害のある児童が、視覚障害のある児童と交流し、お互いの生活や学習の状況を理解し、協力し合うことで、生きる力を育むことを目指している。具体的には、視覚障害のある児童が、聴覚障害のある児童の手を触れ、物の形や質感を確かめたり、聴覚障害のある児童が、視覚障害のある児童の目を見て、物の色や形を確認したりするなどの取り組みが行われている。また、お互いの得意分野を教え合ったり、協力して課題をこなしたりするなどの活動も実施されている。この取り組みを通じて、児童たちはお互いを尊重し、協力し合うことで、生きる力を育んでいる。

写真は、「幼稚部幼児の指導場面」と「ヘレン・ケラー氏の直筆色紙」、「校長のインタビューの様子」

（紙面の解説 等） 1 幼児の指導場面について

この写真は、聾学校の教員にとっては、とても違和感のある写真です。何故かという、聾学校の教員は窓（光）を背に指導を行うことは極力しないからです。それは、光によって顔の表情や口元が暗くなったり、光の方に向くことで眩しくなったりして見えにくくなり、コミュニケーションが取りにくくなるためです。普段から目をよく使い集中することで疲れてしまうことが多い難聴の子どもたちに対する配慮でもあります。今回の場合は、指導の一環として行っているもので、指導後に教員が経緯を教えてくださいました。幼児に光の差す方に先生が座ると見えにくいので「席を移動するね。」と伝えた際に、幼児が大丈夫だと強く言ったようです。そこで、体験的に理解してもらうため、あえて子どもの主張を受け入れ、指導を続けたという場面でした。その後、幼児は眩しくて話がしにくいと気づき、先生に座る位置を変えてもらい、カーテンを閉めることができたそうです。将来、自分がどのようにすればコミュニケーションしやすいのか又はしにくいのかを

理解して説明できたり、よりよい状況を作り出すために相手と調整し変えていく力（セルフアドボカシー）を身に付けたりすることに繋がるシーンだったと考えています。一枚の写真に物語がありました。

2 ヘレンケラーの直筆色紙

函館聾学校のホームページを見た社会福祉法人函館厚生院常務理事の本間茂司様が令和6年9月11日に寄贈してくださいました。創立130周年に向けて教育活動に取り組んでいる本校に飾ってもらうことが良いだろうと判断されたそうです。本校では、長らくこの色紙のコピー（レプリカ）を飾っていましたが、誰もレプリカだとは気付いていませんでした。函館盲聾教育後援会の島津会長様が本校校長を務めていらした際にこの色紙の価値に気づき、コピーして作ったレプリカでした。函館厚生院では長らく関様という方が所持しておられましたが、関様がお亡くなりになった際に、本間茂司様に引き継がれ、本間様から寄贈を受けることになったのです。この色紙には、ヘレン・ケラー氏が来日することに尽力された岩橋武夫氏の名前も書かれており、とても価値のある貴重なものです。函館聾学校にお越しの際には是非、御覧ください。

3 常設看板に残す「未来へのことば」について

結論から言いますと、この取組は行わないことになりました。4月当初に計画したものの、常設看板の予算の目途が立たず、取りやめたものです。

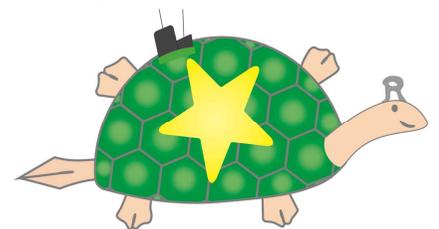
現在、仮設看板として右の看板を令和5年8月24日から掲げていますが、こちらの看板は令和5年から令和7年度まで3年間限定の仮設看板と考えておりました。創立130周年を迎えた年には、常設看板を掲げ、道行く函館市民の皆さんに「未来へのメッセージ」を伝えられるようにと、子どもたちから「未来へのメッセージとしてのことば」を募集し、常設看板にデザインの一部として掲載したいと考えておりました。そして、看板に「since 1895」と書いてあれば、創立〇〇年と書いていなくても、その看板を見た人は「今年は何年目かな？」と見てくれるのではないかと考えていたのです。創立140周年か150周年の際にはご検討いただくと嬉しいです。



記者さんは、令和6年4月1日に掲載したホームページ掲載の「校長の挨拶」を見たようです。

ちなみに、函館聾学校のマスコットキャラクターは、「函亀郎(かんきろう)」に決まりました。小中学部の子どもたちみんなが一人ずつ考えてくれた案の中から選ばれたものです。決まる経緯は詳しくHPに掲載中です。かわいがっていただければとありがたいです。

函館聾学校マスコットキャラクター



函亀郎 (かんきろう)

生きる力育む

「触れさせる教育」を推進

今年で創立100周年を迎える函館聾学校(函館聾校長・現在幼稚園部、小学部、中学部合わせて14人が在籍)は、これまで「実物・実体験・本物・優れたものに触れさせる教育活動」をテーマに、さまざまな授業形態や学校行事を実施している。同校は1895年に、函館訓盲学校として設立された後、1950(昭和25)年北海道函館聾学校として独立、前身の函館盲聾院の院長を務め、当時の函館市民からも多くの教育者として尊敬を集めた、佐藤政次郎さんが歴代校長を務めた。

在校生の聞こえ方などそれぞれに合った教育や、実体験を支えた豊富な校外学習が魅力の同校だが、昨年からは「北海道函館聾学校ボランティア」がその教育方針をさらに強化している。従来は大学生や聴覚障害教育の関係者による単発のボランティア活動が多かったが、同事業は聴覚障害への理解を深める講座や手話、指文字体験を用意し、その教育の知識がないボランティアや聾学校に興味がある人が参加しやすい環境が整っている。

講習を受けた参加者はボランティアバンクに登録され、同校が募る行事の中から、内容や日程が合うボランティアに参加する仕組みになっており、幼稚園クリスマス会のサンタクロース役の運動会前のクラスドレッシングなど多岐にわたる。また近年、同校が所在する深堀町会では、夏休み時期のラジオ体操に手話を加えるなど、地域の連携もより一層強固になってきている。

100周年記念事業は、生徒からイラストを募ったマスコットキャラクターの作成、同校に



130周年に合わせて寄贈されたヘレンケラーの直筆の色紙

残す常設看板の「未来へのごとび」の考案などを予定。また同校ホームページには、歴史を紹介するムービーやコラム、資料が掲載されている。記念式典は25年10月25日に開かれる。

(中島泰太郎)

常に生徒と職員と同じ目線を意識し、学校運営に努めているという副校長は、同校の強みや今後の抱負を聞いた。

(聞き手・中島泰太郎)
副校長に聞く

学校の特徴や強みを教えてください。

豊富な「実物・実体験・本物・優れたもの」に触れさせる教育活動を通して、経験に裏付けられた言語力を基盤に、生徒の目と社会参加を目指しています。

今年4月には、自然体験学習として八幡港に行き、漁船や漁に使う道具の見学や、福田海産(函館市賀茂町)でサメの解体ショーや、すり身作りを体験しました。他にも1年をかねて福を育てたり、昨年5月に同校卒業生でボランティアの聴覚障害者を迎え、ボランティア体験も行いました。

学校を運営する上で心掛けています。

現在14人が在籍しており、1人や2人のクラスが多くあります。教員は多くですが、友人やクラスメートは子どもに変わるものはありません。

生徒の聞こえ方に合わせて授業を行う教員と児童



聾学校

- 1895年(明治28)年 米国婦人シャーロット・ピンクニー・ドレーパー女史が創設。現在の青柳町会館付近に教場を設け、函館訓盲会と称する。
- 1932年(昭和12)年 ヘレン・ケラー女史が来訪
- 1948年(昭和23)年 北海道立函館ろう学校となる。盲学校長の佐藤政次郎氏が学校長を兼任。
- 1950年(昭和25)年 北海道函館ろう学校に改称。
- 1954年(昭和29)年 現在の深堀町に校舎を新築移転する。
- 1992年(平成3)年 心身障害児適正就学推進研究校に指定。
- 1995年(平成7)年 創立100周年記念式典を挙げる。
- 2019年(令和元)年 平成31年度学童・生徒ボランティア活動普及事業協力校(3年間)に指定される。

学校の特徴などについて語る門真校長



「特別支援」のモデルに 専門性継承にも力

「今後どのような学校にしていきたいですか。」ボランティアバンクや地域の協力もあって、生徒たちにはさまざまな授業提供の体制ができています。この体制を維持し、特別支援学校のモデルにならざるを得ないと思っています。また、日頃協力をしてもらっている地域に何か恩返しをしたいと考えており、それが生徒たちにも新たな学びをもたらすのではと思っています。

生徒たちがさまざまな体験を通して、目の届いていることを伝える力、困っていることを伝える愛を込めていくことを養えるよう取り組んでいきたいです。人口減少などで再編される特別支援学校もありますが、この先学校がどのような形になっても専門性の火は絶やせず、歴史を継承していきたいのです。